

海外調査報告

- パキスタン、エジプト、モロッコ -

前研究第一部主任研究員 大矢 通弘

1 はじめに

今や、地球はインターネットで結ばれ、居ながらにして世界各地の情報が容易に入手できる。しかし、こうした媒体を通して得られる情報が多くなればなるほど、逆に実際に現地を訪れ、自分の目で見、手で触れ、体全体で感じることの重要性が増すのではないだろうか。私は、平成9年6月にパキスタン、エジプト、モロッコの河川を現地に見聞する機会を得た。その中で、河川と人間との関わり等について感じたこと及び考えたことを以下に記す。

2 河川と人間との関わりについて

(1) インダス川(パキスタン、写真1、2)

インダス川から引いている灌漑用の水路において、牛がたむろしていた。40 近い気温の中で、牛たちは水中にうずくまってじっとしているのである。その黒いかたまりが何か異様なものに思え、ここには別の世界が広がっていると



写真1 牛のたむろする水辺(パキスタン)



写真2 モヘンジョダロ(大浴場)

(2) ナイル川(エジプト、写真3、4)

ナイル川は砂漠の中に位置する乾地河川である。河川の周辺にのみ緑があり、人間はそこでしか生活できない。緑化の努力を常に継続していないとすべてがたちまち砂に帰してしまうような自然の苛酷さ、乾燥地帯のきびしさを感じた。暑いのに汗は出ない。そしてのどは渇く。アジアモンスーン気候の湿った空気に慣れた体には、カラカラに乾いた空気はなじめなかった。人間の生存に水は不可欠であるという基本的なことを改めて実感した。この地において、古来より人間は天文学的知識とナイロメーター(水位計)等の工夫によってナイル川の水量変動を予測し、大河の恵みをうまく利用してきたのである。



写真3 ナイル東岸より西岸を望む(中央は渡しのフェリー、ルクソール)



写真4 ナイロメーター(氾濫の記録を示す)

(3) ウェルガ川(モロッコ、写真5、6)

モロッコは、国土のほぼ中央をアスラス山脈が走り、山脈の南は乾燥気候で砂漠が広がっている。地中海、大西洋に面した海岸平野は豊かな農業地帯であるが、見た限りでは山にはほとんど樹木はない。降った雨はすぐに流出してしまうことが予想された。ダム建設地点の川においても、乾期にはほとんど水がなく、涸れ川(ワジ)に近い。乾期に水量がないからこそ、雨期に降った雨を貯めておくための施設が必要であり、そのダムの目的は単純明快である。ウェルガ川は自然のまま、橋も古いものが多い。また、畑作用に水車で河川水を汲み上げている状況も見られ、世界は多様でも人間の考えることは案外同一であると感じた。

3 河川と文明について

(1) 河川と文明と土木技術

河川と文明という観点では、今回、大河のほとりに栄えた



写真5 ダムサイト上流(乾期で水はほとんど流れていない、モロッコ)



写真6 モロッコの天然河川と水車

世界の四大文明(メソポタミア、エジプト、インダス、黄河)のうち2つを訪れた。インダス文明衰亡の原因には種々の説(アリア人の侵入説、大洪水説、河道遷移説、気候変動説等)があるが、現実にモヘンジョダロ遺跡を訪れてみると、砂漠の中にいる感じであり、乾燥化を伴った気候変動説を支持したくなる。また、インダス川およびナイル川の流域上空から、果てしなく広がる不毛地帯の真ん中に、水路と道路がまっすぐに伸びている姿が見えた。自然と人間との闘いを思わせ、苛酷な自然条件の中で人間が生きていくための生命線を支えているのが土木技術であると感じた。水路そのものが文明の象徴に思えた。まさに、土木技術(Civil Engineering)は、文明(Civilization)を支える重要な基盤技術であるといえよう。

(2) 文明の力と文化

文明 = 普遍性を有する標準化されたもの、文化 = 多様性を有する特殊なものと定義できる。都市部の冷房のきいたホテルで食事をしていると、そこがパキスタンであるのか、エジプトであるのかの区別はなく、東京にいる錯覚さえ覚えた。また、砂漠の中の空港で離陸準備に動き回る人々を機外に眺めていると、40 を超える灼熱の中で、しかもすべては神の思召しの国で、飛行機を決められた予定に従って、毎日同じように運行させるといのはすごいことだ、大変な労力があるだろうという気がした。すべて「文明」のもつ普遍的な力である。ホテル、飛行機は現代文明を象徴するものである。こうした文明の利器を利用しつつ、ある地域、ある集団に固有のもの、身内にとっては快適であるが部外者にとっては異質であり、容易に適応できないものである「文化」を垣間見るといのが、別の側面から見た今回の調査であった。

4 おわりに

河川に限らないが、調査の対象物は時々刻々と変化している。時間的のみならず空間的にも広がりをもっている。また、調査する人によっても感じ方は異なる。その意味で、現地調査はあくまでもある瞬間の、ある部分の姿が、たまたまその時の調査者にどう映ったかということに過ぎず、それを全体の真の姿として捉えることは誤りであろう。

ただし、調査者の側から見れば、その時感じたこと及び考えたことはその個人にとってはまぎれもない事実であり、かつ意味があるのも確かである。